

## 密教僧慧超の再考察

李 廷 秀

I. 慧超は新羅僧として入唐、五天竺を巡歴して帰って残した旅行記『往五天竺國傳』の著者として有名である。『往五天竺國傳』はA. D. 8世紀初のインドと中央アジアに関して極めて貴重な資料であるが、現在完璧な状態で遺存していない。でも今世紀の初期（A. D. 1908）に敦煌石窟から発見されて以来、世界の学者たちに関心を惹き研究も多様な分野で進行している。既存の研究分野は次のように三つの特徴で整理することができよう。

- 1). 原本の校勘、註釈、翻訳の作業。（発見の当時から相当部分が欠落状態にあり、現存の内容についても誤・脱字があるので、その誤・脱字と一部の難字を明確するために研究が継続し、原本の校勘作業をもとにして各国から翻訳本が出版されている。）
- 2). 『往五天竺國傳』の著者の慧超に関する研究。
- 3). 八世紀のインドと中央アジアに関する研究。

その中で慧超の生涯に関する研究は日本の学者高楠順次郎によって最初になされた<sup>1)</sup>。最近には慧超が禅僧としての学説が発表されたこともある<sup>2)</sup>。本論では慧超の生涯において密教的な活動相を論考するのが目的である。

II. 現在われわれが慧超の生涯に関する事実として確證し得るものは但だ三つ程度で、その外は推測に過ぎない。

1. 慧超が印度を巡歴して帰路で龜茲に到着した時期が、開元十五年（A. D. 727）十一月上旬である。そのとき唐の節度使が趙君である史實<sup>3)</sup>から慧超が唐に帰国した時期と経路を知ることができる。
2. 慧超が記述したインド旅行記が当時大変重要示されたことである。慧琳（A. D. 737-820）が『一切経音義』100巻（A. D. 783-807年）を著述するとき『往五天竺國傳』を収録した事実がある<sup>4)</sup>。
3. 密教經典の訳経に参与した事実に関する慧超自身の記述がある。唐玄宗代（A. D. 712～756）開元の三大士の中の1人だった善無畏三蔵と開元8年（A. D. 720）洛陽に到着した金剛智三蔵の『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』訳

経に筆受した<sup>5)</sup>。その事実からわれわれは慧超は8世紀頃には中国で活動したことを確認することができる。

Ⅲ. 密教の高僧として慧超に関係する資料を編年史的に再構成すると、

1. 『賀玉女潭新雨表一首（并答）』（大暦9年〈A. D. 774〉2月5日）によれば<sup>6)</sup> 慧超が代宗の命に依って、盤屋縣の玉女潭で祈雨した後に雨が洽足にふったことを皇帝に陳賀する内容としての短い表文がある。慧超は当時に内道場に泊まりながら密教儀禮を行なった内道場沙門として存在したことを知る事ができるし、当時に慧超は内道場の沙門として相当に尊敬された。

2. 『三蔵和上遺書』（大暦9年〈A. D. 774〉5月7日）の不空三蔵の遺訓によると<sup>7)</sup> 「私がこれまで密教の秘法を伝授したから30余年に門下に入門した弟子は多教で、5部の律法を学んだ弟子たちが八宗を成立させたが、現在は殆ど亡くなっていて、いまは6名しか存在しない。それは誰かといえば、金閣寺の含光、新羅の慧超、青龍寺の慧果、崇福寺の慧朗、保壽寺の元皎と覚超である。後学の中で疑問がある者があれば、あなたたちが啓示して法燈が消えないように私の法恩に返えしてください。」とある。このように慧超は当代最高の阿闍梨不空三蔵が認可した密教高僧として端的に記録されている。同時に後学の指導を囑託されたことは慧超の位相を代弁する表現である。

3. 『請与善当院両道場各置特誦僧制』（大暦9年〈A. D. 774〉6月6日）によると<sup>8)</sup>、三朝灌頂阿闍梨不空三蔵の弟子名の中で慧超の名が登場する。

4. 『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』の序（建中元年〈A. D. 780〉5月5日）によれば<sup>9)</sup>、開元21年癸酉（A. D. 733）に薦福寺の道場で金剛智三蔵から「大乘瑜伽金剛五頂五智尊千臂千手千鉢千佛釈迦曼殊室利菩薩秘密菩提三摩地法教」を伝受され、8年くらい金剛智三蔵に師事した事実等がある。

上記の記録は慧超が密教僧としての現存する関係資料の全部である。史料からは慧超がいつ頃入唐して、いつ頃インドを遊歴して、帰唐後の仔細な活動状況について、また故国新羅との関係等に関して知ることはできない。ただ、慧超は80歳以上の高齢まで密教經典の訳経と研究に専念したことと、末年には五台山の乾元菩提寺で住錫したことについては推定することができる。故国新羅には帰国することが不可能であった。慧超が訳経の筆受者としての力量と内道場の沙門としての信頼、そして当代最高の阿闍梨として推仰された不空三蔵の上足の一人等は慧超が教團的で相当な地位に存在したことについて確認することができよう。

Ⅳ. 慧超は中国密教の開創者としての金剛智と不空三蔵から順次に学んで密教大

家の班列で主導的に活動したくらの密教高僧の境地に達した。慧超は金剛智三蔵と一緒に『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』等の經典を翻訳する程度の卓越した梵語の実力を持っているし、經典に関しての研究を持続的に遂行した。その熱烈な研究伝法の姿勢と晩年の五台山に入山して修行に渾身した偉大な密教阿闍梨である。慧超のそのような活動状況からみると、インド求法旅行記の『往五天竺國傳』は密教僧としての求法の旅程行路として推定することができる。そのために『往五天竺國傳』は当時 (A. D. 8 初) のインドと中央アジアの諸の文化状況を含有しているから、当時のその地域に關聯する研究に貴重な資料として認定されるが、これからもっと深く研究して新羅から入唐した密教僧慧超の業積に対して再検討しなければならない課題が残される。

- 
- 1) 高楠順次郎「慧超傳考」『大日本佛教全書』卷113, pp61～82.
  - 2) 温玉成「西行的新羅高僧慧超—原来是少林弟子」『中國文物報』1992,10,18.
  - 3) 『往五天竺國傳』大正蔵51, p979 中.
  - 4) 大正蔵54, p925 下.
  - 5) 大正蔵20, p724 中.
  - 6) 『代宗朝贈司空大辨正廣智三蔵和上表制集』卷5, 大正蔵52, p855 上.
  - 7) 『代宗朝贈司空大辨正廣智三蔵和上表制集』卷3, 大正蔵52, p844 上～中.
  - 8) 『代宗朝贈司空大辨正廣智三蔵和上表制集』卷4, 大正蔵52, p845 中.
  - 9) 大正蔵20, pp724 中～725 上.

〈キーワード〉 韓國佛教, 慧超, 『往五天竺國傳』, 密教僧

(東國大學校大學院)